

第 1 章

アフガニスタン国家の特質と対周辺国関係 について

鈴木 均

要約：

アフガニスタンをめぐる国際関係は、同国の成立以来のパシュトゥーン部族国家としての特質と深く関わっている。また英露の緩衝国家として出発した経緯が現在でも同国の国民統合を規定している側面は無視できない。本論ではアフガニスタンの南方、西方および北方の国境線をめぐる経緯と現状を順に検討することによって同国の対周辺国関係を概観し、アフガニスタンの対周辺国関係がもっている歴史的規定性と 9・11 以降の新しい要素について全体的な見通しを得ることを目指したい。

キーワード：

アフガニスタン、部族国家、デュアランド線、パシュトゥーン民族、ヘルマンド川水利権問題

1 アフガニスタンの国家的特質について

アフガニスタンの歴史を一瞥するとき、「アフガニスタン Afghanistan」と

いう国名自体のなかに既にこの国の成り立ちの特別な事情を読み取ることができる。周知のようにこの名称の後半を構成する「スタン-stan」はペルシャ語（ダリー語）で場所や地方、邦ないし国を意味する語尾であり、国名として使われるのはパキスタンやウズベキスタンなどとも共通なのだが、問題は前半の「アフガン」ないし「アフガーン」である。

アフガニスタン研究の古典的な参考書であるデュブリーの『アフガニスタン』はその序論の部分で「アフガニスタンは単純に『アフガンの土地』を意味する」としたうえで、「アフガン」という言葉が「嘆き悲しむ」を意味するペルシャ語の faghan に該当するとし、そして「アフガン」が特定の民族への呼称として歴史上初めて使用されたのは紀元前 3 世紀のササン朝ペルシャの文献においてであるとしている。

このデュブリーの指摘が根拠のひとつにしているカロー『パターン人』では、「ササン朝における東の辺境の民族についての唯一の言及」として、ナクシェ・ロスタムのシャープール 1 世の碑文のなかの記載を紹介している。このことから明らかに、「アフガン」という呼称は他称として用いられていたと考えられる。

またフォーヘルサングは『アフガニスタンの歴史と文化』のなかで、アフガンの名称について以下のように記している。「この名称はおそらく、6 世紀初期、インド亜大陸で著されたサンスクリット語の文献であるヴァラハ・ミヒラの『大占星術集成』の中に、アヴァガーナースという民族名で登場するようである。」（フォーヘルサング、37 頁）

このようにイラン（当時のペルシャ帝国）とインド亜大陸という異なる地域で同じ系統の呼称が用いられていたとすれば、それは例え他称であったとしてもある民族集団の呼称としてある程度定着していたものと考えられよう。

この「アフガン」の人々が現在のパシュトゥーン民族とどの程度重なり合う存在であったかどうかはまた別の問題だが、いずれにしても彼ら「アフガン」人が数千年来この地域の支配的民族（のひとつ）であったということは定説化しているという事ができる。

そこでこの「アフガニスタン」という国名は、「アフガン人／パシュトゥーン人の国／土地」という意味を構成しており、その限りにおいてパシュトゥーン人がアフガニスタンの支配的民族であることもまた正当化される、との議論も成り立つという考え方がある。

ここで視点を転じて、現在のアフガニスタンにおける民族的な構成を概観してみることにしよう。アフガニスタンの人口的な統計は、現在までのところ 1979 年に一度だけ不完全な人口センサスが行われており、現在の推計もすべてこれに基づいていると思われる。それゆえ民主的な国家体制の根幹に関わる民族的な構成についても極めて不十分なデータしか存在していない。

インターネットで公開されている CIA のワールド・ファクトブックによると、パシュトゥーン人の人口に占める割合は 42 パーセントとなっており、アフガニスタンのなかで最も多い人口を占めているが絶対多数には及んでいない。アフガニスタンの全人口は 2005 年年央の推計によると約 3,000 万人であるから、アフガニスタン国内のパシュトゥーン人口は約 1,200-1,300 万人ということになる。一方パキスタンにおいては 2004 年の人口約 15,200 万人のうちパシュトー語使用者は 8 パーセントであり、パンジャービー語、シンディー語、スィライキー語に次ぐ使用者数となっている。

表 1 アフガニスタンの民族構成

パシュトゥーン人	42%
タジク人	27%
ハザラ人	9%
ウズベク人	9%
アイマク人	4%
トルクメン人	3%
バルーチ人	2%
他	4%

(出典) CIA, *World Factbook*.

(<http://www.cia.gov/cia/publications/factbok/>)

これを比較すると、パシュトゥーン人は現在アフガニスタンとパキスタンの両国にほぼ分断されるかたちで居住しており、全体では2,500万人前後ということになる。だが上述のようにアフガニスタンでは最大多数を占めるのに対し、人口規模の大きなパキスタンの中では少数民族である。

このようにある意味で絶妙にパシュトゥーン民族を分断するデュアランド線 1893 年の策定によって、アフガニスタンとパキスタンの両国はあたかもシャム双生児のように複雑に絡まりあう利害関係で結ばれているということができよう。

さらにアフガニスタンにとって重要なことは、前近代においてガズナ朝（997-1150 年）以外に独立の王朝を戴いたことのないこの地域が 1709 年のミール・ワイスの叛乱以降、一貫してパシュトゥーン民族のドゥッラーニー家によって統合されてきたという事実である。

ドゥッラーニー家というのはその創始者の名前からアブダリー家とも呼ばれたが、その 4 代後のズィーラクが百歳を越えたとき、長子のバラク以下 3 人目までの息子が彼に辛く当たったため末子のポーパールに跡を継がせたという。（Hayat Khan, p.57f）これが現在まで続くバラクザイ家とポーパールザイ家の分岐をめぐる物語である。周知のように 2002 年に帰国した元国王のザーヒル・シャーはバラクザイ家であり、カルザイ大統領はポーパールザイ家の出身といわれる。

そもそもドゥッラーニー（アブダリー）家は大きくズィーラク系とパンジュパイ系に分けられ、前者の方が身分が高いとされるが、この区分はすでに現実的な統合機能はないという。ズィーラク系にはポーパールザイ家、アルコザイ家、バラクザイ家、ムーサーザイ家の 4 家が含まれ、またパンジュパイ系にはヌールザイ家、アリーザイ家（ウドザイ家もこれに合流）、イスハクザイ家、ハクワニ家、マクー家の 5 家が含まれる。

このうちポーパールザイ家は最も有名な名家で、アフマド・シャーの以下の王族を輩出したサドザイ家もこれに属し、代々アブダリー家全体をも統括してきた。その証としてサファヴィー朝ペルシャの初代国王イスマーイール 1 世

地図 1 アフガニスタンの民族構成



出典：鈴木均編『ハンドブック現代ケルカニスタン』（明石書店、2008年）412頁

の勅書 farman を代々伝えてきたという。多くはカンダハール周辺に居住して農業や放牧に従事しており、彼らはその高貴さと勇敢さを誇っている。

一方バラクザイ家はその勇敢さではポーパルザイ家に劣るものの人口規模では彼らを押し、カンダハール南部のヘルマンド川流域に居住している（1937年に尾崎三雄がダーウッド・ハーンとこの辺りを旅行しているのもこのことと関係しよう）。彼らはドースト・モハンマド・ハーン（1818-39年；1842-63年）の時代にパシュトゥーン全体を統括する部族に昇格している。（以上 Hayat Khan, 64f）

このような王族を中心とした細かな系譜を追っていくことは、ある意味でその俎アフガニスタンの歴史を追うことであり、その正統性と統合の原理を具体的に明らかにするという意味で興味が尽きない。だがここで翻ってなぜこのような系譜が（そしてそれだけが）アフガニスタンの歴史の中心部分をなすのかという問いを發してみると、それはアフガニスタンの国家としての特質に関わる問題であることに気付かされるのである。

アフガニスタンの場合には、このように国王に対する国民側の意識は一般的に希薄であり、また国王の側もアフガニスタンの国民を等しく市民として扱うという近代的な統治理念などは持ちようがなかったであろう。

このことに関連して、尾崎三雄のアフガニスタン滞在中の「日記」のなかの記事が参考になる。この日尾崎はサラーム・ハーネの宮中に招かれ正装で出席したが、宮中の騒然とした様子に驚いて以下のように記している。「国王ト云フモノニ対スル考ヘ方ガ全ク我々ト異ナリ、単ニ実権者程度ニ考ヘラレ居ルニ非ラザルカトサヘ疑ハレル。」（1936年3月4日付）

アフガニスタン国王（ザーヒル・シャー）がパシュトゥーン民族の名家の家長としていかに高い地位にあらうとも、彼が少なくとも国民の半分にとって「単なる実権者」であるに過ぎないことは自明であり、そこに尾崎が比較した戦前の日本のような天皇を中心とした国民統合の意識があらう筈もなかった。

いずれにしても陸封国家でありなおかつヒンズークシュ山脈が国土の中央

部を大きく分断するように走っているというアフガニスタン国家の地勢的な条件を前提とする限り、どのような統治原理を採用しようとも部族主義の強固な壁に阻まれて極めて統治の行き届きにくい条件下にあることだけは認めなければならない。

そのうえでアフガニスタン国家の性格を規定してきた要素のひとつとして、やはりパシュトゥーン的な部族主義の国家的規模への敷衍的適用ということが考えられるであろう。アフガニスタンは確かに極めて多様な民族的・言語的集団によって構成されてはいるが、18世紀以来の歴史的経験の中でそれらの間での「民主的な」合意形成の制度を象徴的に保持してきたことも確かである。そしてそのモデルになったのは言うまでもなく多数派を形成する支配民族たるパシュトゥーン民族の部族的合意形成システムであった。

L.デュプリーはソ連軍侵攻以前のある論考でアフガニスタンをアジア・アフリカ世界に普遍的に見られる「農民・部族社会 Peasant-tribal Society」の典型として紹介した。ダーウード・ハーンによる1973年のクーデターの直後に書かれたこの論考で、デュプリーは既に「国家と個人の契約でなく国家と地域集団の契約を」という近代国家モデルのアフガニスタンに相応しい代替案を提示している（Dupree 1974, p.5）

いずれにしてもこのような代替モデルの適用という発想は、ターリバーン敗走後のカーブル政権による新体制造りのなかでも例えばロヤ・ジルガのようなかたちである程度生かされてきたともいえる。だが中央権力の整備に伴う地方的な「軍閥」勢力との軋轢が今後どのような形をとるか、換言すれば現在「軍閥」といういびつな形に収斂している地方的な紐帯を今後どう解きほぐしていくかという問題については現在でもほとんど手が付けられていないと言わなければならないのである。

「軍閥」勢力がアフガニスタン国家の統合にとって障害である最大の理由は、それが武力を保有しているということでもなく、また民主的な制度による正当性の裏付けをもたないということでもない。それは端的にいえば極めて容易に外国勢力（周辺国および超大国）の代弁者となってアフガニスタン

国家の利害に敵対しうる存在だからである。もちろんこの場合、現在のアフガニスタン政府自体が外国勢力（米国）の強力な後ろ盾によって存立しているという事実は公然たる前提条件としてある。

デュアランド線を含む現在の国境線を前提とする限り、単一民族国家をモデルとする近代国家へのアフガニスタンの脱皮は不可能だとする議論がある。だが1960年代から1970年代にかけて何度か高揚したパシュトゥーンスタン運動は結局現在までのところ何の結果をももたらしておらず、むしろ現状の領域を前提とした国家の復興こそが唯一の現実的な選択肢として存在している。

このような現状を出発点として考えた場合、アフガニスタンの国家としての存立条件は、少なくともパキスタンをはじめとする周辺諸国との関係なしでは考えられないということが自明である。またこのことは既に述べたようにアフガニスタン国家それ自体の特質として捉えなければならないことでもある。

それはアフガニスタン国家の地政学的な特徴を、国境線という観点から捉えなおすという作業にも通じている。その場合にアフガニスタンにとって最大の問題となるのは既に言及したデュアランド線であることは言を待たない。デュアランド線はアフガニスタンにとってかつては対インド国境であり、1947年以降は対パキスタン国境となったが、いずれにしても南アジアとの文化的境界であり続けたのである。

これに対して西側のイランとの国境線は注目を浴びることはより少なかったが、特にヘルマンド川の水利権問題を巡って永く係争問題であり続けた。最後にトルクメニスタン、ウズベキスタン、タジキスタンという中央アジア3国との国境線は、それぞれの民族が国境線を挟んで居住しており、アフガニスタンに国家としての脆弱性と多様性の両面をもたらす要因ともなってきたと考えられる。

以下ではアフガニスタンを領域的に特徴づけているこれらの国境線に関わる問題を順に検討していくことにしたい。

2 南側から見たアフガニスタン

既に触れたように、アフガニスタン国家の存立にとって歴史上そして現在でも最も重要かつ決定的な意味を持ってきたのは 1893 年に英国によって策定されたデュアランド線である。デュアランド線に関しては第 2 章以降でも言及があるが、ここでは最も基本的な事項のみ押えておくことにする。

そもそもデュアランド線というのは 1893 年 11 月 12 日に英国のインド総督特使モーティマー・デュアランド卿と時の国王アミール・アブドゥル・ラフマーン・ハーンのあいだで結ばれた数項目にわたる合意であって、当該地域の地図は添付されているものの国境線の画定ではない。その合意文書によるとチャマン周辺など特に問題のある地域については具体的な記述があるものの、それ以外は将来的な国境線の画定にゆだねており、ペシャーワル北西部のモフマンド Mohmand 居住地域については空白である。またこの合意はアフガニスタンの北辺オクサス川（ハリールード川）流域における対ロシア国境（1873 年に英露のあいだで取り決められた合意）の地域におけるアフガン軍の撤退とのセットになっており、この合意によってアフガニスタンを英露の緩衝国と位置づける意図が明白であった。

アダメクによるとその後英国はこの合意がアブドゥル・ラフマーンとの「個人的な」ものであったと表明しているが、しかし同時にこの合意が永続的であると主張している。1919 年のラウルピンディ和平協約でインド・アフガニスタン国境線について誓約の後、1921 年のカーブル協定以降はこれが継承されて現在にいたっている（Adamec1980, pp.403-405）。

この時期からそう遠くないインド・アフガニスタン国境の実情について、尾崎三雄は以下のように説明している。「アフガニスタンと印度を境ひする東南方國境線は一本の線と考へるよりも、幅の廣い帯状のものであると解するのが妥當であるかも知れない。」（尾崎 1941 年、32 頁）

いずれにしてもデュアランド線はその後インドおよび 1947 年以降パキ

スタンとの実際上の国境線として固定化する一方、アフガニスタン国内においてはパシュトゥーン民族主義者たちによる「パシュトゥーニスタン」運動の最大の攻撃目標ともなった。

だがここで指摘しておくべきことは、「パシュトゥーニスタン」の創設が仮に実現した場合に、それは少なくとも現在のアフガニスタン国内におけるパシュトゥーン人と他の少数民族の人口構成の劇的な変化を意味しており、現在人口の半分以上を占めるパシュトゥーン民族以外の国民にとって決して歓迎すべきことではないという事実である。加えてこの国境地域における徹底したパシュトゥーン部族主義のアフガニスタン国内への浸透が、結果としてターリバーン支配と似たような状況をもたらす可能性すら否定できないといわれる（Adamec, 2003, 405 頁）。アフガニスタンにおけるターリバーン実効政権の成立自体、見方を変えればパシュトゥーニスタン運動の形を変えた展開であったとも考えられる。

アフガニスタン近代史のなかでパシュトゥーニスタン運動が盛り上がりを見せたのは、1950 年代と 1973 年のダーウッド・ハーンによるクーデター以降の時期であるが、パキスタン・アフガニスタン関係の底流としては 1947 年以来常に存在してきた。

そのなかでもアブドゥル・ガッファール・ハーン（Abdul Ghaffar Khan, 1890-1988）はパシュトゥーニスタン運動を象徴する代表的な人物のひとりである。

彼の主張は単にパシュトゥーン民族の居住地域の独立を主張するだけではなく、印パの分離独立を否定してより広大な領域の統一的独立を目指すものであった。ガッファール・ハーンはマハトマ・ガンジーの非暴力思想に共鳴して「辺境のガンジー」と呼ばれ、印パ分離独立に反対して「パタニスタン」の独立を主張した。彼は世俗主義の立場にたって数多くの政治組織を精力的に指導したが、なかでも「神の挺身者 Khoda-i Khedmatgaran」（赤シャツ隊）が最も有名である。ガッファール・ハーンはパキスタン国籍を取得して同国で政治活動を行ない長期間投獄されたが、アフガニスタンを愛した彼はカ

ーブルで何度となく政府の厚遇のもと生活した。彼は 1988 年にペシャーワルで没したが、その遺志によりアフガニスタン領内のジャラーラーバードに葬られたという (Chand, 1989)。

しかしこのような運動は現在まで具体的な結実をみることなく、後景に退いた形になっている。一方でこれとは全く異なる文脈ではあるが、インド・パキスタン・アフガニスタンから中央アジアまでを一つの地域として再編成しようとする戦略的構想が米国政府によって最近推進されてきており (第 2 章を参照) 今年 3 月 1 日のブッシュ大統領のアフガニスタンの電撃的訪問や 3 日のインドでの演説をみても、米国政府が対中国戦略を含めてインドをこの地域の戦略的なパートナーとして位置づけなおしていることを示唆している。

アフガニスタンとパキスタンのデュアランド線を挟んだ関係が重要なのは、一つにはアフガニスタンにおいて世界最大規模で生産される阿片が現在でも主にこの国境を通過して国際市場に流出しているからである。また米軍の度重なる掃討作戦にも拘らず現在でも不安定なアフガニスタン南部における治安情勢は 9・11 以降のパキスタン国内の「ターリバン化」と深く連動しており (第 5 章を参照) 現状での国際的な秩序の維持をすら脅かしかねない。

これらの問題は本質的にアフガニスタンの南側の国境であるデュアランド線を巡る問題であり、国境周辺地域にほぼ自律的に存在しているパシュトゥーン諸部族の動向によってアフガニスタン・パキスタン関係そのものが大きく規定されている現状をよく物語っているといえる。

3 西側から見たアフガニスタン

アフガニスタンの西側には 936km にわたってイランとの国境がほぼ南北に伸びている。このうち南方の部分は 1905 年にヘンリー・マクモハン Henry MacMohan により設定され、マクモハン線と呼ばれる。北方の部分は 1934 年になってトルコのファフルッディン・アルタイ将軍の仲介で協議のうえ設

定されたファフリー線である（尾崎 1941、33 頁）。

この国境線はイラン側にとってはホラーサーン地方のマシュハドやトルバテ・ハイダリーエ、ピールジャンド、その南のシースターン地方を画しており、文化的にアフガニスタン側のヘラートとの連続性がある。逆にアフガニスタン側にとってはヘラートはその西側に広がるイラン的な文化のアフガニスタン側の中心として意識される。

同時にイランの東端のこの地域はスンニー派教徒が比較的多く居住する地域としても知られており、総じてこの国境線がイランのシーア派世界とその東側および北側に広がるアフガニスタンおよび中央アジアのスンニー派世界を分ける境界としての意味を帯びていることが理解される。

近代史のなかではこの国境は特に南側のシースターン地方におけるヘルマンド川の水利権を巡る両国の係争が国際的な注目を集めてきた。1977 年に書かれたアビディの論文によると、この問題は 1973 年に「ヘルマンド川水利協定」が結ばれて 1977 年に批准されるまで両国間の主要な係争事項であった。

この種の水利権問題は恒常的なものではなく、旱魃の年に浮上してくる性質の問題であった。下流域に位置するイランはより真剣に問題の解決を探り、また両国は可能な限り武力でなく政治的な解決の方策を模索した。しかしイランにとっては辺境地域の問題でもあり、イラン側が国際的な裁定を求めることはなかった。この問題は 20 世紀初頭からずっと継続したが、それはこの地域の開発とより大きな国際関係へのイラン側の配慮が影響していた。

現在シースターン地方がアフガニスタンとの関係で再び注目を集めているのは、オマーン湾に面するチャーバハール港がアフガニスタンへの物流の拠点として再開発されており、その輸送経路がザーヘダーンからザーボルを経由してアフガン側のザランジュにいたる内陸道路となるからである。

この経路は首都のカブルからは距離的に離れているものの、ヘラートやカンダハールといった他の主要都市に対してはむしろアクセスがよいため、将来的にも陸封国アフガニスタンにとって経済的な動脈のひとつとなる可能

性が高い。

以上のように 9・11 以降のイラン・アフガニスタン関係は潜在的には友好的に発展する可能性をもっているとおもわれるが、そこで浮上してくると思われるのがパキスタンとの競合関係である。パキスタンは既にイラン側のチャーバハール再開発をにらんで 180km 東方のグワール港の開発に乗り出しており、これが直ぐにチャーバハール港の開発にとって障害になることはないとはいえ注目すべき動きである。その一方それまでイランと鋭く対立してきたターリバーンの敗走後の地域情勢の変化のなかで、イランがパキスタン側の国益を常に意識し、これを刺激しないように振舞ってきたことも明らかである。

イランとしてはアフガニスタンの情勢変化に対応して対インド関係をも考慮しつつ、差し当たって域内の友好的な相互依存関係の醸成を模索しようとしているのではないと思われる。2005 年 6 月以来再び動き出した、イラン生産の天然ガスをパキスタン経由のパイプラインでインドまで引くという構想もこれと関係しているだろう。

イラン、アフガニスタン、パキスタンの 3 カ国が地域的な連合を形成するという発想は歴史的にも比較的古くからあり、例えばデュプリーは文化的背景から説き起こしてこの 3 カ国の連邦形成の可能性を真剣に検討している。1963 年のこの論文でデュプリーはこの構想が「現状では各国の体制の違いのために問題外」(Dupree1963, p.391)と断りつつも 3 ケ国の「(可能ならば他の中東国やインドも含んだ)経済的な共同市場という考えは魅力的」(Ibid., p.397)だとしている。1963 年当時の米ソ冷戦構造が過去のものとなった現在、少なくともこの構想にとっての大きな障害の一つが取り除かれたことは事実である。

4 北側から見たアフガニスタン

アフガニスタンの北辺の国境線は、19 世紀を通じて南下政策を推し進めた

ロシアとこれに対抗する英国とのあいだでの交渉によって定められたものであり、もう一方の当事者であるアフガニスタン政府はこの交渉過程にほぼ関与していなかったのである。この国境線の設定の事情は3つの部分に分けて考えられる。

最も西側の部分是对イラン国境の部分からアムダリヤ河畔のハメ・アープまでの国境線であるが、これは1873年の英露協定によって着手、その後1885年のヘラート北方のパンジュデの衝突事件を挟んで1887年に画定されたリッジウェイ線である。ハメ・アープよりアムダリヤ川の水源のひとつズールクール湖までの同川を境とする国境線は、ロシアの南下政策に対し1869年に英国がアフガニスタンの中立を申し入れ、1973年に合意を得たものである。ズールクール湖以東ジャマン峠までの国境線は1896年に英露パミール委員によって決定された。

以上のような経緯で画定された北辺国境線は、現在ではトルクメニスタンとの744km（リッジウェイ線の全てとアムダリヤ川の西端）、ウズベキスタンとの137km（アムダリヤ川の西側の一部）、タジキスタンとの1,206km（アムダリヤ川の大部分と小パミール）というように分けられる。

そしてこの国境線を跨いで特にウズベク民族やタジク民族が両方の国家に帰属している現状は、アフガニスタン国家の統合と復興の過程にさらに複雑な要素を加えているのである。

ここでは以下ナタリヤ・ハーンの論考によってウズベキスタンの例を一瞥しておく、現在アフガニスタン国内に居住しているウズベク人の多くは1920-30年代のバスマチ運動の余波で流入してきた人々であり、第二次大戦後はウズベク社会主義共和国がアフガニスタン国内の開発援助に深く関わっていた。ソ連軍侵攻後の1980年代にはタシュケント大学にアフガニスタン人留学生の大きなグループがあったという。

その後1989年のソ連軍撤退から1992年のナジーブッラー政権崩壊までの変化はアフガニスタン難民のウズベキスタン流入を促し、1993年段階で8,000程度のアフガニスタン人が居留していたとされる。その後の調査はウ

ズベキスタン政府によって許可されず、正確な数字は把握されていないものの、両国の国境が戦場から比較的遠かったことやウズベキスタン政府の厳格な難民政策が理由となってその数は現在までそう増加していない。

このように見てくると中央アジア各国は表面的にはターリバーン敗走後のアフガニスタンとの関係が深まっていないかのような印象を受けるが、そうではなくアフガニスタンの復興を軸とした地域的な力学の再編がこれらの国々にどのような形で及ぶのかを注視しているというのが現状であろう（その経済的な側面については第 6 章を参照）。

その意味ではやはりロシア共和国のこの地域への将来的な関与のあり方が決定的に重要と思われる。ロシアが最近のイランの核開発問題について重要な位置を占めていることも、このことと決して無関係ではない。ロシアとイランの関係はイラン・イラク戦争の終結後 1990 年を通して基本的に良好であり、これは現在でも変わっていない。プーチン政権が 2005 年 6 月に革命強硬派のアフマディネジャードのイラン大統領当選をいち早く歓迎したことは、ロシアがイランとの外交関係を域内戦略上いかに重視しているかを物語っている。

5 結びに

以上の考察を通じて改めて強く印象づけられることは、9・11 同時多発テロ事件およびそれに続くターリバーン敗走以後の激しい内政外交の変化を経て、アフガニスタンのパキスタン、イラン、中央アジア 3 ヶ国を中心とする周辺諸国との国際関係が、いうなれば新しい衣をまといつつも 19 世紀のグレートゲーム以来のこの地域の古い地政学的な構造を改めて露呈してきているということである。

それは 1980 年代までの国際関係を強く規定してきた米ソの冷戦構造の解体と深く関連しつつ、また 1979 年のイラン革命後の中東における政治構造の変化やイラン自体の国際的な地位の変化といった新しい要素をも含みこみ

ながら、同時に国境線をめぐる国際的な政治力学と極めてローカルな部族主義とを串刺しにして展開する極めて古い対立と紛争の構造が、この地域の国際関係を規定する牢固たる土台として存在していることを物語っているように思われる。

現在のアフガニスタンを取巻く状況を歴史的に遡って比較すれば、例えばアフガニスタンへの国際的援助とそれによる影響力行使への競争が続くなかで、超大国の思惑をかいくぐるようにしてイラン、パキスタンを中心とした周辺国の協力関係への模索がなされているという状況はいわば1950-60年代に酷似している部分があると言えよう。また日本のアフガニスタンに対する関心やアフガニスタン側からの期待の高まりをみると、時代状況的には尾崎三雄が活動した1930年代に相通ずるところもあるのかも知れない。

そこで我々が次に取り組むべき課題としては、アフガニスタンをめぐる国際関係について、どこが古くからの構造でありまたどこが新しい要素であるのかをまず腑分けし、その上で可能であればこの地域が安定して発展するための新たな枠組みとしてどのようなものがあり得るかという積極的な構想の提示ということになる。

最後にこの報告書の中では十分に触れることの出来なかった重要な問題として、アフガニスタン国家の統合におけるイスラームの役割ということがある。アフガニスタンの国民は現在でも地方の農民が圧倒的多数を占めているが、彼らのイスラームに対する強い信仰には抜き難いものがある。そしてこのイスラーム信仰は一種の民衆的なナショナリズム（郷土愛）と強く結びついているのである。

尾崎は1936年に自らの記録に「僧侶ノ権威洵ニ恐ルベキモノアリ」と記した（尾崎2003、224頁）。アダメクは同じことを次のように表現している。「アミール（国王）は最も地位の低いモッラーの意見でも無視できない」（Adamec1967, p.7）。

周知のように2004年の新憲法制定後のアフガニスタンの国名は「アフガニスタン・イスラーム共和国」であり、これはこの国が統合していくための主

要な原理としてほぼ全ての国民が信仰しているイスラーム教が重要な役割を果たすべきことを意味している。

このような観点でみると、アフガニスタンの周辺国は中国を別にして同じイスラーム国のパキスタン、シーア派を国教とするイラン、世俗国家である中央アジア３ヶ国という色分けが可能であるが、このような表面的な区別よりもむしろ重大なのは、民族構成や地勢的な条件と重なり合った土着的な宗教的権威の存在がこの国の復興と統合の過程にとってどのように関わり合いまた機能していくのかという点である。

以上の問題については、我々にとって今後ともアフガニスタンを考察していく際の将来的な課題として残されていることを付言しておく。

参考文献リスト

- A.H.H. Abidi, "Irano-Afghan Dispute over the Helmand Waters," *International Studies*, Vol.16 No.3 (Jul.-Sep. 1977) , pp.357-378.
- Ludwig W. Adamec, *Afghanistan, 1900-1923—A Diplomatic History*, Berkeley, 1967.
- Ludwig W. Adamec, *Historical Dictionary of Afghanistan*, third ed., Maryland, 2003.
- Heather Bleany and Maria Angeles Gallego, *Afghanistan—A Biography*, Leiden, 2006.
- Olaf Caroe, *The Pathans—550B.C.-A.D.1957*, Oxford 1958 (repr. 1975).
- Attar Chand, *India, Pakistan and Afghanistan—A Study of Freedom Struggle and Abdul Ghaffar Khan*, New Delhi, 1989.
- Louis Dupree, "Afghanistan—Problems of a Peasant-tribal Society," *Afghanistan in the 1970s* (eds., Louis Dupree and Linette Albert), New York, 1974, pp.1-12.
- Louis Dupree, *Afghanistan*, Princeton, Princeton University Press, 1980.
- Louis Dupree and Abdul Rahman Pazhwak, Shah Muhammad Rais (ed.), *Pashtunistan*, Kabul, 2003.
- Azmat Hayat Khan, *The Durand Line—Its Geo-strategic Importance*, Peshawar, 2000.
- Muhammad Hayat Khan, tr. by Henry Priestley, *Afghanistan and Its Inhabitants*, Lahore, 1874 (repr. 1999, Lahore).
- Natalya Khan, "Afghan Communities in Uzbekistan," Touraj Atabaki and Sanjyot Mehendale (eds.), *Central Asia and the Caucasus—Transnationalism and Diaspora*, Routledge, 2005.
- Mariam Abou Zahab and Olivier Roy, *Islamist Networks—The Afghan-Pakistan Connection*, London, 2004.
- General Staff, India, *Who's Who in Afghanistan*, Simla, Government of India Press, 1930.

尾崎三雄「アフガン國境線の性格」『大亞細亞主義』1941 年 1 月号、30-33 頁。

ヴィレム・フォーヘルサング(前田耕作・山内和也監訳)『アフガニスタンの歴史と文化』(明石書店、2005 年)。

山内昌之『納得しなかった男』(岩波書店、1999 年)。

アハメド・ラシッド(坂井定雄・伊藤力司訳)『タリバン——イスラム原理主義の戦士たち』(講談社、2000 年)。